

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

山 下 遺 跡
青 木 遺 跡
小 毬 山 遺 跡

1990

長岡市教育委員会

序

長岡市内には火焔土器の馬高遺跡をはじめ200ヶ所を超える遺跡があり、そのほとんどは遺跡の規模や内容が不明です。このため、長岡市教育委員会では昭和62年度から国・県の補助を受けて、遺跡の概要等を解明することを目的に遺跡の確認調査を始めました。今年度はスキーパー場・ゴルフ場開発計画がある柿町地内の遺跡を対象に調査を実施しました。

調査の結果、遺跡の概要等を知ることができ、今後の埋蔵文化財の保護や開発に伴う保存協議の資料として貴重な手がかりを得ることができました。

今回の調査にあたり、多大な御指導・御協力をいただきました文化庁・新潟県教育委員会・柿町町内会をはじめ関係各位に対し、心からお礼を申し上げます。

平成2年3月

長岡市教科文部会

教育長 丸山 博

例　　言

1. 本書は平成元年度の国・県の補助金の交付を受けて実施した「長岡市内遺跡群発掘調査」の報告書である。
2. 調査は長岡市教育委員会が主体となって平成元年4月21日から5月23日まで柿町の山下・青木・小毬山遺跡を対象に行った。
3. 本書は駒形が執筆・作成した。
4. 第10図(青木遺跡)・第11図(小毬山遺跡)の土層柱状図の凡例は第4図(山下遺跡B・C地点)と同じである。

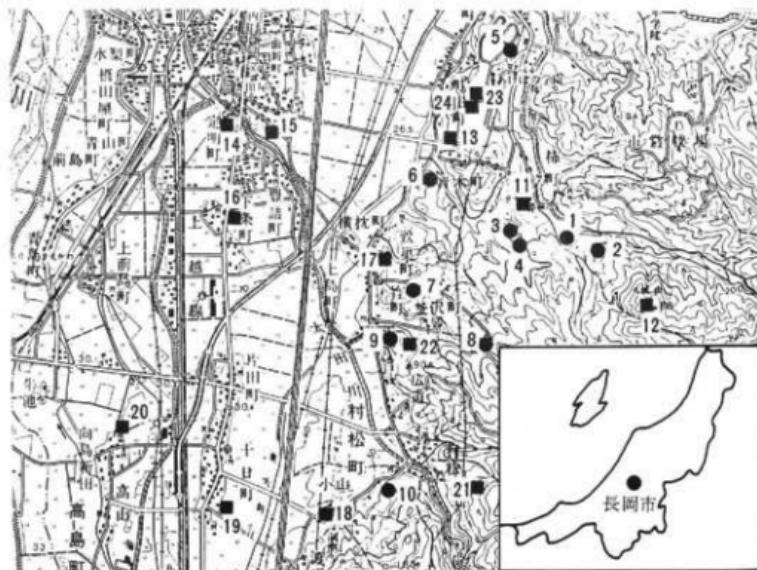
目　　次

1.はじめ	1
2.環境	2
3.調査の経過	2
4.山下遺跡	3
5.青木遺跡	8
6.小毬山遺跡	8
7.まとめ	10
調査体制	10
調査に御指導・御協力を いただいた方々	10

1. はじめに

長岡市教育委員会は昭和62年度から市内に所在する200ヶ所以上に上る遺跡の確認調査を進めてきた。目的は宅地開発・道路建設・土砂採取・ゴルフ場建設などの諸開発との調整にかかる協議資料の整備を目指すもので、国・県からの補助金の交付を受けて実施してきた。昭和62・63年度は土砂採取場や産業廃棄物処理場の建設が盛んな大積地区の遺跡を対象に調査を行い、遺跡の位置や範囲など調査遺跡の内容はもちろん、新遺跡や土砂採取などで消滅していた遺跡を確認するなどの成果をあげてきた。

平成元年度は長岡市の東に位置する柿地区で計画されているスキー場・ゴルフ場開発との調整・協議にかかる資料の整備を目的に、山下遺跡・青木遺跡・小越山遺跡の周知の遺跡と、地形から遺跡の所在が予想された「カヤバ」で確認調査を実施した。なお、スキー場・ゴルフ場開発計画地内で行った分布調査の結果、今のところ予定地内で遺跡は確認されていない。また、柿城跡は事前の協議の段階で計画地には含めないことを事業者と確認した。



第1図 遺跡位置図 (1:50000 長岡)

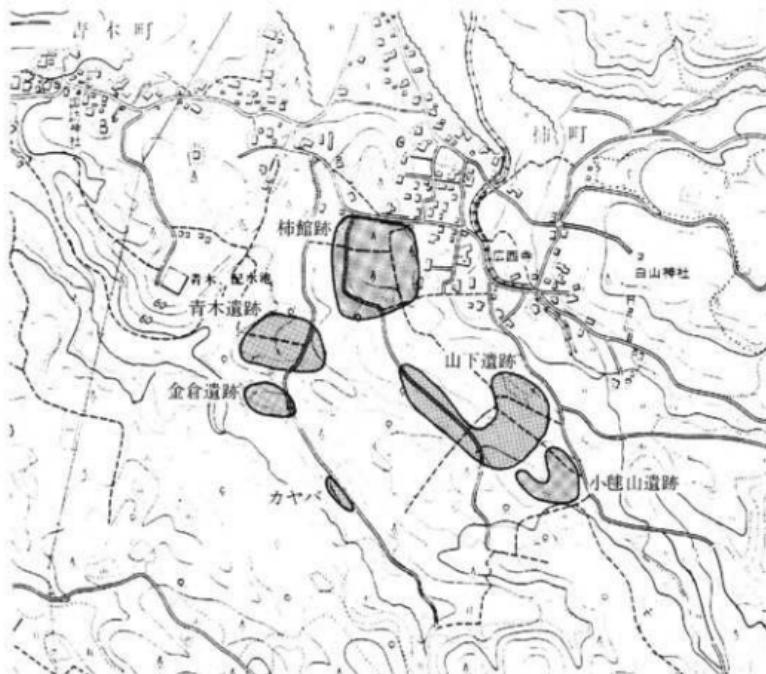
1. 山下 2. 小越山 3. 青木 4. 金倉 5. 高畠 6. 下条山 7. 鶴の巣
8. 入山 9. 長者ヶ原 10. 村松山王 11. 柿館 12. 柿城 13. 町田城 14. 定明城
15. 摂田屋館 16. 下條館 17. 鶴巣城 18. 御橋城 19. 白倉館 20. 高山城
21. 円融寺裏 22. 糖塚 23. 町田1号塚 24. 町田2号塚

2. 環 境（第1図・第2図）

長岡市の東で南北に連なる魚沼丘陵の一つの南蛮山から信濃川に向かって柿川が流れ、南蛮山から西に延びる丘陵は柿川や小さな沢が入り込み舌状な台地を形成している。柿地区はこの柿川沿いに発達した集落で、同地内には縄文前期の金倉、山下・青木・小健山などの縄文中期の遺跡や中世の柿館・柿城がある。この地区的周辺には長者が原や村松山王などの縄文遺跡や、栖吉城などの中世城館をはじめとする中世の遺跡が多く所在している。

3. 調査の経過

遺跡確認のための試掘調査は4月21日の調査機材の調査地への搬入から始め、5月23日の機材撤収までの1ヵ月間にわたって行った。調査は山下遺跡から着手し、調査の状況を見ながら同時に2ヵ所で調査を行ったこともあった。なお、青木遺跡の中心部と金倉遺跡は作付の関係で同意が得られないで調査は行わなかった。



第2図 遺跡周辺の地形図（1/10000）

（柿館跡及び金倉遺跡以外の遺跡は網点の範囲が調査対象地）

4. 山下(さんか)遺跡 (第3図～第9図・第13図)

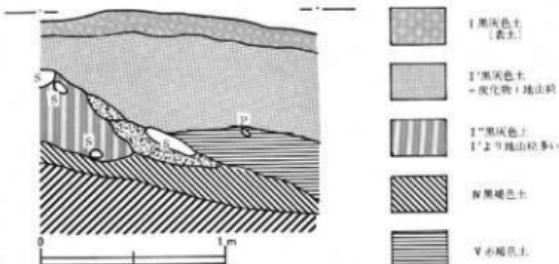
所在地 長岡市柿町字山下4584、字金倉4577番地他

立地 柿川左岸で標高85～95mの丘陵の尾根上に位置している。地目は畑と水田それに若干の杉林である。

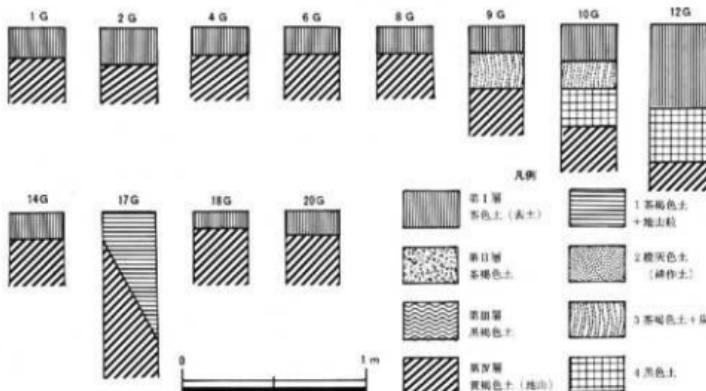
調査の結果 山下遺跡の確認調査は第2図に示した範囲内に2×3mを原則の調査グリッドを25ヶ所設けて行った。その結果、山下遺跡は「山下遺跡」の標柱がある付近一帯(A地点)と、9・22G周辺のB地点、それに柿館跡近くのC地点の3ヶ所で遺構・遺物の集中箇所がみられた(第13図)。ただし、A地点は畑作との関係で疎らなグリッドでの調査のため、遺跡としての分布状況は今次調査では推定することはできなかった。

土層序(第3図・第4図) 山下遺跡B・C地点で遺物包含層と思われる黒褐色土はみられなかった。石開いががあった9・22Gの土層序に深耕による擾乱が観察され、これらからB・C地点の遺物

包含層は削平されたものと思われる。A地点1GはV赤褐色土などがみられ、丘陵上の集落跡とは異なる土層序で、おそらく土器捨て場であろうと考えられる。



第3図 山下遺跡A地点1G土層断面図



第4図 山下遺跡B・C地点土層柱状図



遺跡遺景（西から）
左から山下遺跡A地点・小堀山遺跡・山下遺跡B地点



山下遺跡A地点近景



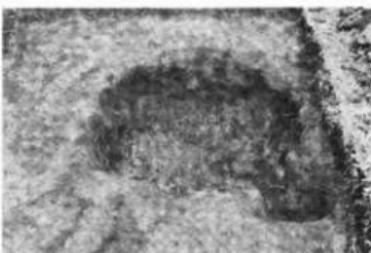
発掘調査風景（A地点1G）



発掘調査風景（B地点炉跡付近）



炉跡検出状況（B地点9・22G）



C地点ピット

第5図 山下遺跡

遺構（第6図・第7図） 確認調査で検出された遺構はB地点での石圓いが（第5図左下）とC地点のビット（第5図右下）である。石圓い炉は線上に並ぶ焼けた4個の川原石と焼土の状況から炉跡と確認したもので、炉跡を構成していた石の多くは深耕で抜かれたものと思われる。炉跡の東には二つに割れた石皿が焼土に接するように置かれていた。住居内で使われた道具かと考えられる。9・22Gには縄文中期中葉の土器（第9図27）が出土している。石圓い炉を持つ住居跡はこのころの住居と思われる。C地点1Gのビットは直径約1m、深さ約35cmの円形ビットで、覆土中に縄文晚期後葉の土器（第9図30・31）が入っていた。性格は不明である。



第6図 山下遺跡B地点9・22G遺構実測図

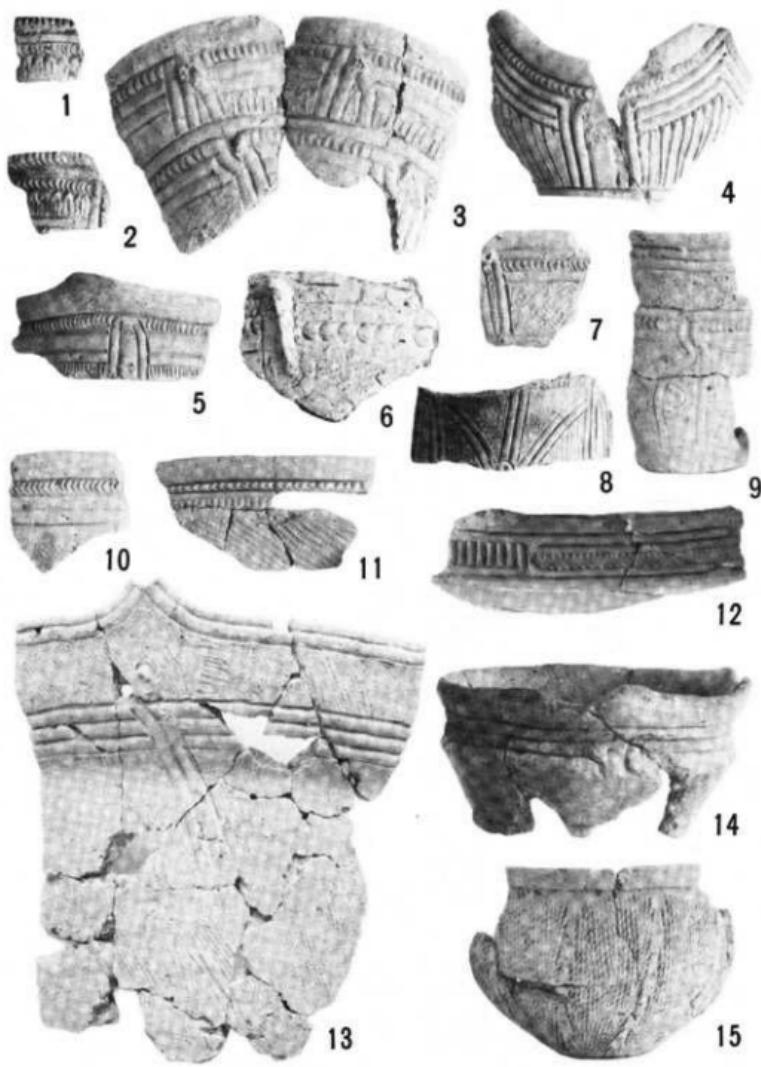
遺物（第8図・第9図） 山下遺跡の確認

調査で出土した遺物は縄文土器が1,224点（重量42.8kg）、土製耳飾り1点（第9図24）、打製石斧6点（第9図25）、石皿6点、凹石3点ではほとんどはA地点1・3G出土である。1～23はA地点出土の土器で、縄文中期前葉を主体に、中葉それに後期前葉の土器が出土している。1～18は中期前葉の土器で、9はコップ状の深鉢土器、11・12は浅鉢土器、15は木目状捺糸文を胴部に施した丸い土器。16は大木7a式もしくは7b式の古い段階に並行する土器で、円筒形の深鉢土器である。19・20は中期中葉の土器で、19は渦巻状突起の土器である。21はアンギン編みの痕跡がついた中期の上器底部である。22・23は縄文後期前葉の三十稻場II式の土器で、22は橋状突手の刺突文土器である。B地点は9・22Gを中心とする縄文中期中葉（26～28）と後期前葉（29）の土器が出土したが、量は少ない。C地点は後期後葉のビット出土土器（30・31）以外には2Gで縄文土器の小破片が出土したに過ぎない。

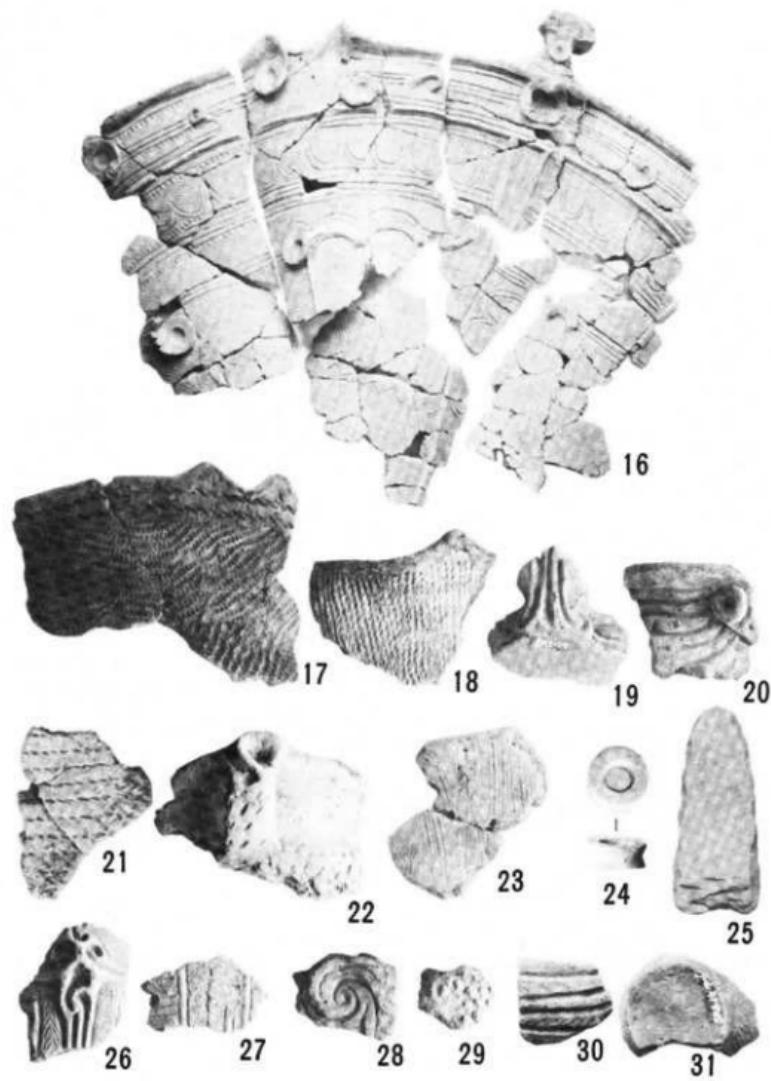
まとめ 山下遺跡はこれまでみてきたように遺構・遺物の集中箇所がA・B・Cの3地点に分けられることがわかった。調査対象地が限定されたA地点を除いたB・C地点の遺跡としての推定範囲は第13図に示したとおりである。これら3地点の時間は出土土器からAが縄文中期前葉を主体に中葉そして後期前葉が、Bは中期中葉と後期前葉、Cが縄文晚期後葉である。山下遺跡はおそらくA地点を中心に縄文中期から後期に栄えた集落と推察される。



第7図 山下遺跡C地点1G検出ビット実測図



第8図 山下遺跡A地点出土遺物



第9図 山下遺跡A地点(16~25)・B地点(26~29)・C地点(30・31)出土遺物

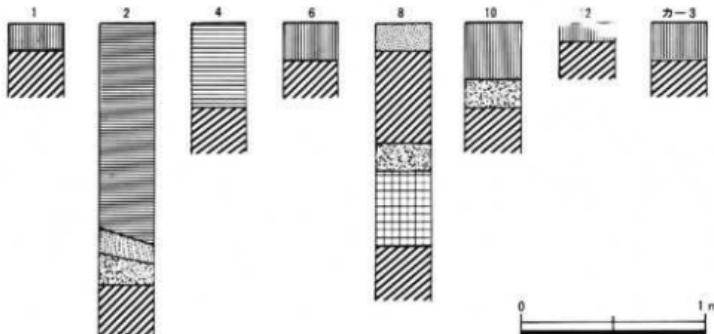
5. 青木(あおき)遺跡 (第10図・第12図・第13図)

所在地 長岡市柿町字金倉4369-2

立地 山下遺跡の丘陵から南に瘤状に伸びた標高65~75mの支脈で、地目は畠である。

調査の結果 青木遺跡の確認調査では遺物・遺構は全く発見できなかった。土層序の観察では地山が深く、攪乱土層が見られたり(2・8G)、1・12Gなどでは表土の下に地山があった。土層序からは傾斜地を水平に改良したことなどが考えられる。

まとめ 遺構・遺物が検出されなかったことは、遺跡の中心地を外れて調査をしたのか、または傾斜地を水平にするなどの開墾で遺跡が消滅したのか、などが考えられる。いずれにしてもグリットを設定できなかった部分を発掘して再度確認したい。また、近くのカヤバを調査したが、ここも遺構・遺物は確認できなかった。

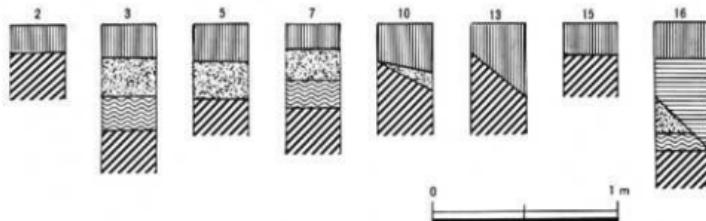


第10図 青木遺跡土層柱状図

6. 小越山(こまりやま)遺跡 (第11図・第12図・第13図)

所在地 長岡市柿町金倉4512-2、字当の屋敷3953

立地 小越山は山下AとB・C間の沢頭を囲む標高100mの台地にある。杉林と畠。



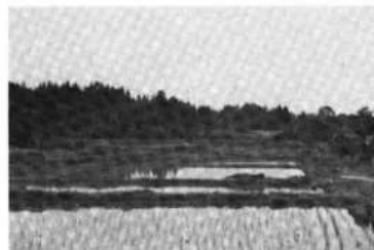
第11図 小越山遺跡土層柱状図



青木遺跡近景



青木遺跡 2 G 土層断面



小桂山遺跡（東から）



発掘調査風景（小桂山遺跡 3 G）



発掘調査風景（小桂山遺跡 11・12 G）



小桂山遺跡出土土器

第12図 青木・小桂山遺跡

調査の結果 北の柿川に向かう台地上の2・3・7Gから縄文土器が出土した。西の台地上には遺構・遺物とも検出されなかった。

土層序（第11図） 縄文土器が出土した3・7Gなどに遺物包含層の黒色土が見られた。他は地山上に薄い表土があるだけのところが多い。

遺物（第12図右下） 小毘山からは縄文土器の破片が9点（重量0.18kg）出土した。他に遺物はない。縄文土器は中期前葉のカマボコ状を呈する平行沈線文の土器があり、他は、縄文施文の土器である。

まとめ 小毘山は山下A地点側の杉林から少ないながらも縄文土器が出土し、そこが中期前葉の縄文入たちの活躍した場（集落かキャンプ地かは不明だが）であることが確認された。だが、山下B地点側の畠は遺構・遺物とも検出できず、遺跡地とは考えられない。

7. まとめ

山下遺跡を中心とした今年度の遺跡確認調査では、山下遺跡が3地点に遺構・遺物が分布することが確認され、小毘山遺跡は山下A地点に向かう尾根に遺物の散布を確認し、青木遺跡の今年度調査では遺構・遺物とも確認できず、また、遺跡の存在が予想されたカヤバは遺跡でないことなどが確認された。そして、既にこの調査結果の資料に基づいて開発主体者と道路計画と遺跡との調整についての協議を開始するなど、確認調査の成果を活用している。今後ともこの「長岡市内遺跡群発掘調査」は継続して行い、諸開発との協議調整にかかる資料の整備に努めたい。

調査体制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 丸山 博）

調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会職員）

調査協力員 小熊博史（長岡市市史編さん室職員）

調査作業員 柿町町内会有志ほか

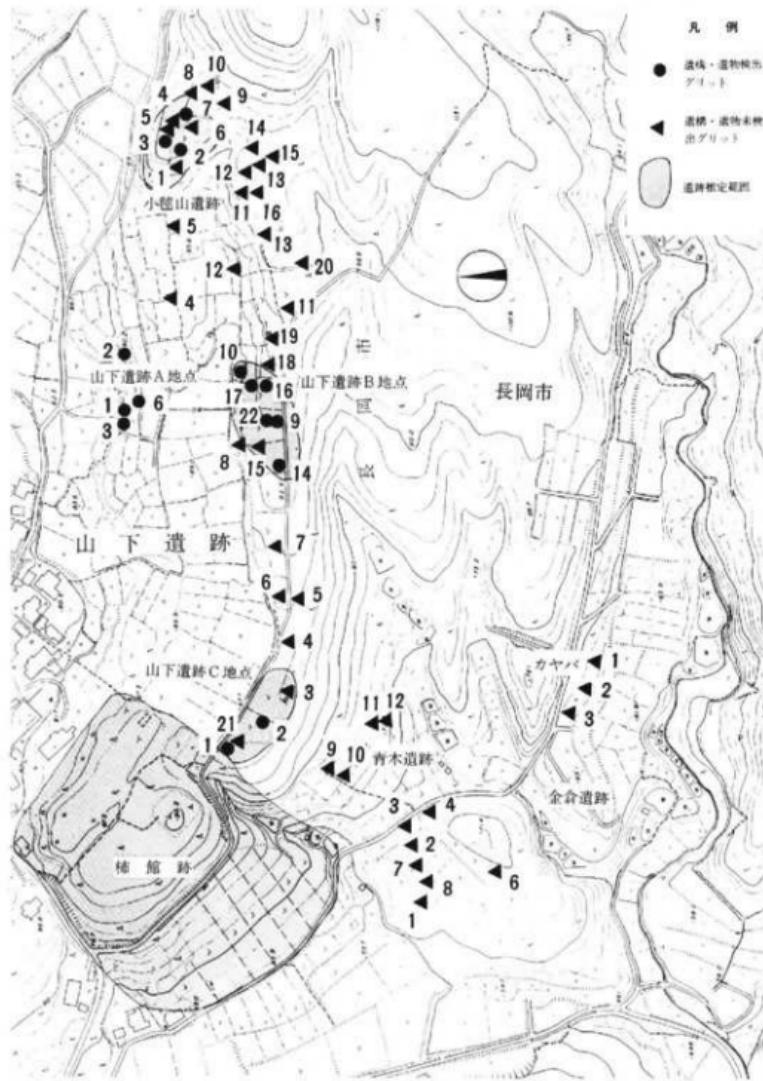
調査事務局 西岡富雄（長岡市教育委員会社会教育課長）、清水正一（同課課長補佐）

鈴木孝行（同課副主幹）、長谷川勉、佐山美智子、笠原敏和（同課職員）

調査に御指導・御協力をいただいた方々（五十音順）

伊部重雄・伊部義直・加藤金一・加藤進・川上昭一・川上三保一郎・神保重盛・神保三代作武政一・竹津甚信・竹津末作・竹津清二・羽賀タイ・室橋保（以上土地所有者）

伊部昌一・鈴木俊成・柿町町内会・有限会社長岡測量社



第13図 発掘調査概要図 (1/4000)

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

山下遺跡・青木遺跡・小越山遺跡

平成2年3月26日印刷 平成2年3月30日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：株 中 越
